

## 【我が人生と明治大学】

### (入学の動機)

戦後復興期の小学生時代、NHK 砧技術研究所では電波の記念日に砧小学校の生徒を所内に招き、テレビ放送実験の映像を公開し見学させておりました。

砧小学校 6 年生(1951 年)であった私には、公開実験でのブラウン管上に見える映像が不思議でなりませんでした。そんな体験が中学校、高校に進むにつれてラジオ、テレビに興味を持つようになり、テレビ放送が始まると同時に、テレビ受像機、アンテナを自作してテレビ放送を楽しんでおりました。しかし解らないことが多くあり大学に進んでもっと専門的に学びたいと思うようになりました。電気工学科を受験目標として決めました。

高校 3 年生になるとほとんどのクラスメイトが予備校です。私も親友と一緒に通うようにしました。予備校の場所が明治大学和泉校舎の最寄駅、永福駅前にあり明大生が青春を謳歌している姿が校舎の窓から見え、その時この大学に入ろうと決めました。

担任の先生に進路を相談すると国公立は全教科が出来ないと無理だから、理数の得意な荒井の実力から明治が一番無難だろうと言われ、迷うことなく明治大学を受験しました。すべり止めでもなく、他校併願でもなく工学部電気工学科一本にしぶりました。おかげで浪人することなく入学することが出来ました。

高校で机を並べて予備校通いをした親友は明大生を見て私とは違った考えを持ったのでしょうか、俺は国を守ると言って防衛大学に入学して行きました。

### (学生生活)

入学して 2 年間の教養課程は和泉校舎で学ぶものと思っておりましたが、工学部は全て本校駿河台及び聖橋校舎で 4 年間神田界限で学ぶ事になりました。入学して驚いたのはクラスメイト(電気工学科 100 名入学)のほとんどが地方高校からの出身で下宿生活でした。自宅通学者は私を含め 6 人でした。18 才で東京に出てきて一人暮らしをしている面もあり、家庭が恋しいのかクラスメイトがよく我が家に遊びに来ました。目的はお袋の作る食事が目当てでした。私の家は世田谷区内の近郊農家であったので、荒井の家に行けば食事にありつけると云うことであったのでしょう。

電気工学科の学生は部活、学生運動には関心がなくノンポリ学生が多かったことでクラスメイト同士の付き合いが多く、秋葉原の電気街での市場調査、歌声喫茶、麻雀などを楽しんでおりました。授業が終わると麻雀の達人が黒板に牌の配列を書き、クラスメイトに伝授する講義が行われました。数学の得意な学生のこと、すぐ習得してしまいました。

教養課程は、高校の授業の復習みたいなもので講義に出席しておれば単位が取得できるという程度で、地方の高校で優秀な成績で卒業してきたクラスメイトには物足らなかったのでしょうか、授業が終わると三々五々よく夜の街に消えて行きました。暫くすると授業も受けずに途中で消えて行く者もいました。

専門課程の年(1960)になって、安保闘争で学生運動が過激になり駿河台校舎がバリゲートで封鎖され講義が休校になることがよくありました。しかし我々の学びの校舎は、聖橋校舎で

あった為、ほとんど影響を受けずに済みました。聖橋校舎は鉄骨のボロ校舎で廊下を歩くとガタガタ音が出るほどの校舎でありましたので、それが幸いしたのか学生運動の拠点から外れており授業も研究も存分にできました。

専門教科では、東北大学で八木(宇田)アンテナを発明した宇田教授が講師として、無線工学の教鞭を執っており、自分の一番学びたい科目であったので熱心に聴講しました。武藤ゼミでは電子デバイスを専攻し、卒論テーマは TR(真空管から TR の時代)の 3 定数としました。授業以外に武藤、宇田先生よりテレビ放送アンテナに関する専門知識を教えて頂きました。これからは電子立国の日本になると云われ、君たちがその礎になりなさいと指導されました。この二人の先生との出会いが我が人生を決定づけました。

我々の卒業時は、就職も売り手市場で青田刈りという言葉も流行語になる時代であった為、就職するクラスメイトは 4 年生になった時点ではほとんど内定しておりました。卒業生は 70 名で 30 名は留年したか中退したか卒業者名簿にありませんでした。2 名は学校に残り、後に教授となり生田校舎で後輩学生に教鞭を執っておりました。私は宇田、武藤先生の推薦もあり八木先生(技術院総裁、大阪大学総長、参議院議員等歴任)が創設した「日本が生んだ世界のアンテナ」八木アンテナに内定しました。

### (社会人生活)

昭和 36 年(1961)3 月卒業と同時に入社しました。研修は研究所長の下で受けることになり ST アンテナの指向特性を計算して、研修論文を英語で提出するよう宿題が与えられました。明治大学卒業生の真価が問われる研修でしたが、和英辞典と計算尺を使って奮闘し、何とか 6 ヶ月の研修を終え一般社会人となりました。

オリンピック開催が 3 年後に控えており全国にテレビ放送局を建設する国策が立てられ当社が指定企業になりました。即戦力としてテレビ送信所の現地調査、設計を担当するようになり、東京タワー(東京テレビ放送 12ch アンテナ)を皮切りに全国津々浦々(全ての都道府県)に出かけました。オリンピック(1964 年 10 月)開催の年には地方都市へ 271 日出張し最も多忙を極めました。その後も各地方都市の民放局の多局化時代となり、出張が続きました。その当時、高速交通機関は新幹線(東京~大阪)間、高速道路は(名古屋~大阪)しかありません地方テレビ放送局に出かける時の交通手段は主に飛行機でした。この時期に国産の飛行機 YS11 型が開発され日本の空を飛ぶようになっておりました。巡航速度 400km/h 新幹線並みの速さで機体がムーンライトの愛称で定期飛行しており、深夜羽田空港を飛び立ち翌朝福岡空港に着き、午前中客先に出向き放送局の技術者と打合せするという生活でした。1970 年 3 月ほど号ハイジャック事件が発生、赤軍派により日本で初めて航空機が乗っ取られました。当社の課長が乗っており北朝鮮まで連れて行かれてしまったのです。連れて行かれるシーンがテレビニュースで放映され、帰還するまでは緊張した日々でした。その当時、私も航空機をよく利用しており皆が心配してくれましたが私の場合は、事故にも合わず良い思い出が多くありました。この年 2 月鹿児島空港から徳之島空港に向かう機内より、日本初の人工衛星「おおすみ」の打上げの瞬間(地上数百 m)を写真に収めることができました。この職業に就いていればこそその感動的な一瞬でした。

この時期、明治大学の同志が社で社長から平社員まで全てのポストに在籍するという学閥の組織「オーオ一明治」のよき時代でした。その後オイルショック等を経て1986年になり経済企画庁が景気後退宣言を発表しました。バブルが徐々に進み株価、土地価格等がうなぎ上りになりました。女子社員が嫁入り資金200万円を自社株につぎ込み、半年後500万円の大台に乗ったのを機に売り抜け、喜んで結婚退社していきました（インサイダー？）。しかし90年になりますとバブルがはじけ倒産が続出し、我々も大打撃を受けました。会社も吸収合併（国際電気、八木アンテナ、日立電子）となり大企業日立の傘下に完全に入りました。2度にわたり分社合併を繰り返し、誇り高き八木アンテナの社名が消滅してしまいました。現在の社名は「日立国際八木ソリューション」です。気が付いてみると明治大学を卒業して50年となっていました。ちょうど潮時と思い退社に合せ、全ての仕事からリタイアすることにしました。仕事の最終期にデジタル化移行に伴い奈良テレビ放送の本社新社屋、生駒テレビ送信所が建設され、当社がSTL、送信所放送アンテナ設備を受注、設計する事となり携わりました。そんな縁で奈良に住み続けたいと思うようになりました。

入社当初携わった東京タワーのテレビ放送アンテナ群も役目を終え、今年電波の記念日を期して世界一の東京スカイツリーのデジタル放送アンテナへと移行され完了しました。この時、東京に行き世界一の電波塔のアンテナを眺めながらアナログの終焉が自分史と重ね合わされ涙腺が緩んでしまいました。50年間好きな仕事が出来た事は、明治大学で「個」の精神と「技術」を授けてくれた二人の恩師、日本を代表する日立グループ企業の諸先輩に培って頂いた「スキル」によるものと感謝し、誇りとするところです。

### （校友会活動）

会社において一線を退いていた時、会社とは違った別世界の人達と一緒に会を楽しみたいと思っていた矢先、校友会活動への出席のお誘いが塩川先輩（6代目支部長）よりありました。妻の後押しもあり奈良県支部の活動に出席するようになりました。毎年総会に出席し著名人の講演を拝聴し、懇親会を楽しみ、また定期的に開催しているビールパーティー、忘年会、ゴルフコンペ等に参加しております。支部の活動に参加することにより校友会の目的が達せられる一助にならばと思い、積極的に参加しております。

私の趣味は野鳥撮影とゴルフです。校友とのゴルフコンペが一番楽しく、特に大学時代野球部で活躍した田中（元幹事長）、葛本（幹事）、林（副支部長）氏、チャリティーコンペにお誘い頂く安田（監査委員）氏とプレーする時です。ドライバーで50~100Yほどオーバードライブされますが、お相手してもらっています。春、夏、冬休みに必ずお誘い頂き楽しんでおります。

### （最後に）

明治大学校友との係わりがこんなに人生を豊かにしてくれるとは、校友の皆様方に感謝するこの頃です。最後の勤務地が関西支社であつた為、《大和は国のまほろば》の地、この美しい奈良を永住の地と定めました。私は、先月後期高齢者の仲間入りをしました。もう東京には戻りません、今後ともよろしくお願いします。

昭和36年（1961）工学部電気工学科卒 荒井 勇